

羅馬書第五章は一節より十一節までに於て専らキリストに依る救拯を説いた、信仰による恩恵、信仰の生活に與へらるゝ力、及び信仰の結果たる救拯は力強く説かれた、十二節よりパウロはアダムとキリストの比較に入る、アダムとキリストは各々人類の二大代表者である、全世界を蔽ふ二つの大なる流れの源頭に二人は各々立つてゐる、罪と死との源頭にはアダムが、義と生との源頭にはキリストが立つてゐる、人類の罪と死はアダムより來り、人類の義と生とはキリストより來る、此事を説きしものが十二節―二十一節である、原語聖書に於ては字數二百五十八を算する（邦訳聖書の約半數）に過ぎないのであるが、之について古來より註解又は解説の試みられしことは幾許なるを知らず、その費されし字數は到底數へ難いのである、茲には細密なる註解にわたるを避けて、重なる點にのみ注意を向け、以て大體の主旨を探らうとするのである。

最も重要な句は十二節と十八節とである、邦譯聖書はこれを左の如く譯してゐる。

- (12) さればは一人より罪の世に入り、罪より死の來り、人みな罪を犯せば死の凡ての人に及びたるが如し、
(18) この故に一つの罪より罪せらるゝ事の凡ての人に及びし如く、一の義より義とせられ生命いのちを獲ることも凡ての人に及びり。

人類の始祖アダムが墮罪のために死を受くるに至り、其爲にかれの子孫にも同一の悲運が臨んだ事を十二節は述べる、かく一の罪より罪せらるゝ事が凡ての人に及んだ、しかしキリストの義は彼を信ずる凡ての人に義と生命いのちを

とを與へる、人はキリストにありて罪を赦され、義とせられ、限りなき生命を受くるに至つた、アダム一人のために罪と死が人類を襲ふに至りしと相似て、キリスト一人のために義と生とが人類に與へらるゝに至つた、此事を説きし者が即ち十八節である。

別の語を以て此事を云へば、「人類は一人によつて樂園を失ひ、又一人によりてこれを恢復せり」と云ふ事である、アダムも人類の代表者、キリストも人類の代表者である、神はいづれの場合に於ても代表者を以て人類に相對した、アダムを以て人類の代表者と見なせし故その墮罪を人類全體の墮罪と見て之に死を與へ、同様にキリストを人類全體の代表者と見なして、其の義の故に人類に永生を賜ふに至つたとパウロは主張する、即ち人類の運命はかゝつて其代表者の上にある、第一の代表者の罪のために「罪せらるゝ事」が凡ての人に及び、第二の代表者の義のために「義とせられ生命を獲る事」が凡ての人に及んだ、人類の運命の縮まりしも拓かれしも一に其代表者に基づいたのであると、これパウロの説く所である。

此説に對して先づ人類學上の故障が提出される、進化論に據れば人類の祖先は「猿人」である、然るに創世記はアダムを完全なる人と見て、その處より人類の墮落せしを主張する、科學は人類の動物よりの進化を見、聖書は人類の聖境よりの墮落を主張する、この間に明白なる矛盾がある、この矛盾を除去せんと欲して腦漿を絞りし神學者は幾人あるかを知らない、又次には倫理學上の故障がある、人は各々自己に對して責任を有つべき筈である、自身罪を犯さば自身罪を受け、自身義なれば自身賞を受くべき筈である、然るに他の或一人が自己の知らぬ間に自己及び他の凡ての人の代表者とせられ、彼の罪の故に自己も又（他の凡ての人も同様に）その罰として死

を受けねばならぬとは餘に不合理である、同様に或一人が又全人類の代表者と見られて、彼の義の故に自己も亦（他の凡ての人も同様に）永生を以て報いられると云ふのも不合理であると、かく倫理學上よりの反對がある、そして又これに對する神學者よりの辨解もある。

問題は決して簡易ではない、パウロの所説の深きと共にそれに對する疑問も亦深しと云はねばならぬ、そして我等の取るべき態度は先づパウロの主張を明確に探知することである、然る上にて採るべきは採り棄つべきは棄てねばならぬ、パウロの所説の全部又は或部分が明白に背理であると解つた時にも尚ほ之を固執するは頑愚である、同時に其中に深くして眞なる所ある場合にも之を斥くるは、同じく頑愚である、今日パウロにして再生せんか、上述の如き疑問を以て彼に迫る人は其數少なくあるまい、併し乍ら彼は近代の人類學や倫理學は當時問題とならざりし故今も亦問題とならずと稱してたゞ其確信を反覆強説するに止まるであらう、さり乍ら我等は今日の科學なる者を全然無視してはならぬ、又無視することは出來ぬ、宗教と科學とを全然分離して考ふると云ふ近代の精神は我等の採らざる處である、科學より見て聖書の所説の合理とせらるゝ時は後者に強き支柱の與へられし時である、勿論聖書の教は天啓に立つが故に科學の證明を得て初めて眞理となるのではない、然し乍ら聖書の所説を科學も亦裏書きする事となればそれに一層の確實性と光輝とが與へられるのである、又頭腦を以てのみ研究せらるゝ科學が聖書の眞理を悉く又完全に證明することは固より不可能である、それにも係らず科學者が科學上より見ても又聖書の所説の誤謬ならざる事、又は眞理と見らるべき事を明かにせんとするは、實に貴き努力である、有名なるニュウトンは言はずもがな、比較解剖學の元祖たる佛のキヴィエー、偉大なる動物學者たる米のル

イ・アガシの如き孰れも深き科學者にして深き基督者であつた、宗教と科學の調和を計りしために兩者を深く且正しく解し得たのである、宗教的にも又科學的にも充分に眞理を探究し、眞理なる以上は確く之に立つと云ふ態度を我等は取らねばならない。

パウロの主張は神は人類に對するに其代表者を以てすると云ふに在る、之に就て誰人にも先づ明白なる一事は人類が一つの種であると云ふ事である、白色人種、黄色人種、銅色人種、黒色人種等の別あれども、各人種間の結婚の可能、及び其間に必ず子の生るゝ事は人類の一なることを語るものである、又一人種の子が小兒の時他人種の間に居れば其國の純粹なる語を語り得るが如き、或は又低き社會道德の間に育てられて道德觀念の頗る稀薄なる野蠻人が一度福音を信ずるに至れば全く別の人となるが如き、いづれも皆人類一如の眞理を傳ふる者である、人類は一なりとは人類學と聖書とが等しく主張する所である、又「此神は凡ての民を一つの血より造り」と、パウロはアテンスに於て説いた（行傳十七の二六）。

次に我等に知らるゝ明白なる一事は人類の共同責任（solidarity）といふことである、之は學問の問題ではなくて人生の實際問題である、事實の上に於て人類の共同責任は儼として存してゐる、之を好むも好まぬも事實は飽くまで事と實である、之より脱せんと力むるも人は到底脱し得ないのである、見よ一家に於て其戸主の所業又は現狀は家族全體に影響を與へるではないか、戸主は其家族の代表者であるがためである、同様に町村長の言行は其代表する町村の全體に影響し、縣知事の言行はその代表する県民全體に影響する、また大臣或は使臣は國民の代表者である故、その言ふ所行ふ所は全國民に必ず影響し來るのである、戰爭の破裂せし場合の如き國民全體の

併し共同責任の原理は人類に禍のみをもたらさなかつた、代表者の罪に因りて死を受けし人類は茲に又代表者の義によりて生を受けるに至つたのである、神はアダムの失敗を補ふべく其獨子を人となして世に降し、彼を人類の新たなる代表者となし、彼をして人類に代つて罪の罰を受けしめて人類の罪を赦し、彼をして人類に代つて義を成就せしめて人類に永生を與ふる道を取り給ふたのである、人類の一體なる事と代表及び共同責任の事とを事實として認むる上はこのキリストの人類代表と彼一人よりして恩恵が全人類に臨みし事との決して不合理ならぬを知るのである、十八節の前半は實に悲しき音信である、「この故に一つの罪より罪せらるゝ事の凡ての人に及びし」と讀みて我等は人類共同責任の恐しさに慄へるのである、さりながら後半の如何に嘉き音信なるよ、「一つの義より義とせられ生命を獲る事も凡ての人に及びし」と云ふ、キリスト一人の義が義と生命とを全人類に及ぼすのである、感謝すべきかな此事！

かくて今や光明の時代である、始祖の墮落のために、陰暗の彷徨を續けねばならなかつた人類社會に、今やはや義の太陽は昇り來つて眼くらむばかりの光輝を放つてゐるのである、キリスト既に我等に代つて罪の罰を受け義を成就せしがために、我等は今かれを信じさへすれば罪を消され義を與へられ永への生命を以て恵まるゝのである、「神罪を知らざる者を我等の代りに罪人とせり、これ我等をして彼にありて神の義となる事を得しめん爲なり」とある（哥後五の廿一）、實に今や恩恵の時代である、此絶大の幸福が我に與へらるゝ事を思へば、人間世界に尚ほ存する所の災禍、愁苦、哀痛の如きは云ふに足らない、まことに然うである、義の太陽は既に上り恩恵の光は人類の全野を照して居る、然るにも係らず未だこの光の人類の全部にゆき亘らぬは何故であるか、云ふま

でもなくそれは我心靈の戸を閉ぢて此光を導き入れぬ人の頗る多いからである、光が普く照さないのである、
普く照して居るのに之を我魂の前より斥けつゝある人が多いのである、さらば凡ての人よ速かに靈魂の戸を撤し
て赫耀^{〔かくよう〕}たる靈界の光を導き入れよ、凡ての善き事、幸なる事、恵まるゝ事は、此事よりして起り來るのである（凡
ての惡しき事、禍なる事、呪はるゝ事が彼^{かの}一事よりして起り來りしが如くに）。

羅馬書第五章は一節から十一節において、もっぱらキリストによる救いを説いた。信仰による恵み、信仰の生活に与えられる力、そして信仰の結果である救いが力強く説かれた。十二節からパウロはアダムとキリストの比較に入る。アダムとキリストはそれぞれ人類の二大代表者である。全世界を覆う二つの大きな流れの源に、二人はそれぞれ立っている。罪と死の源にはアダムが、義と生の源にはキリストが立っている。人類の罪と死はアダムから来て、人類の義と生はキリストから来る。このことを説いたのが十二節―二十一節である。原語の聖書では字数二百五十八を数える（邦訳聖書の約半数）に過ぎないのだが、これについて昔から注釈や解説がどれほど試みられてきたか分らない。それに費やされた字数は到底数えきれないほどである。ここでは細かい注釈に立ち入るのを避けて、主要な点にのみ注意を向け、これによって大体の主旨を探ろうとする。

最も重要な句は十二節と十八節である。邦訳聖書はこれを次のように訳している。

(12) こういうわけで、ちょうど一人の人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして、すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がったのと同様に。

(18) こういうわけで、ちょうど一人の違反によってすべての人が不義に定められたのと同様に、一人の義の行為によってすべての人が義と認められ、いのちを与えられます。

人類の始祖アダムが罪に落ちたために死を受けるに至り、そのために彼の子孫にも同じ悲しい運命が臨んだこと

を十二節は述べている。このように一人の罪によって罪に定められることがすべての人に及んだ。しかしキリストの義は、彼を信じるすべての人に義といのちを与える。人はキリストにあつて罪を赦され、義とされ、限りないいのちを受けるに至った。アダム一人のために罪と死が人類を襲うに至ったのと同じように、キリスト一人のために義と生が人類に与えられるに至った。このことを説いたのが、まさに十八節である。

別の言葉でこのことを言えば、「人類は一人によって樂園を失い、また一人によってこれを回復した」ということである。アダムも人類の代表者であり、キリストも人類の代表者である。神はいずれの場合においても、代表者を通して人類に向き合われた。アダムを人類の代表者とみなしたため、その罪に落ちたことを人類全体の不従順と見てこれに死を与え、同様にキリストを人類全体の代表者とみなして、その義のゆえに人類に永遠のいのちをお与えになるに至ったとパウロは主張する。つまり、人類の運命はかつてその代表者の上にあった。第一の代表者の罪のために「罪に定められること」がすべての人に及び、第二の代表者の義のために「義と認められていのちを得ること」がすべての人に及んだ。人類の運命が閉ざされたのも切り開かれたのも、ひとえにその代表者に基づいているというのが、パウロの説くところである。

この説に対して、まず人類学上の問題が提示される。進化論によれば、人類の祖先は「猿人」である。ところが創世記はアダムを完全な人間と見て、そこから人類が墮落したと主張する。科学は人類の動物からの進化を見、聖書は人類の聖なる状態からの墮落を主張する。この間に明白な矛盾がある。この矛盾を取り除こうとして知恵を絞った神学者が何人いたか分からない。また次には、倫理学上の問題がある。人はそれぞれ自分に対して責任

を持つべきである。自分自身が罪を犯せば自分が罪を受け、自分自身が正しいならば自分が行いに対する報いを受けるべきはずである。それなのに、他のある一人が自分の知らない間に自分および他のすべての人の代表者とされ、彼の罪のゆえに自分もまた（他のすべての人間と同様に）その罰として死を受けなければならぬというのは、あまりにも不合理である。同様に、ある一人がまた全人類の代表者と見なされて、彼の義のゆえに自分もまた（他のすべての人間と同様に）永遠のいのちをもつて報いられるというのも不合理であると、このように倫理学からの反対がある。そしてまた、これに対する神学者からの説明もある。

問題は決して簡単ではない。パウロの主張が深いと同時に、それに対する疑問もまた深いと言わなければならない。そして私たちの取るべき態度は、まずパウロの主張を明確に理解することである。その上で、取り入れるべきものは取り入れ、捨てるべきものは捨てなければならない。パウロの主張の全部または一部が明白に理屈に合わないとは分かった時にも、なおこれを固執するのは愚かである。同時に、その中に深くて真実な点がある場合にも、これを退けるのは同じように愚かである。今日パウロが生き返ったとしたら、上述のような疑問をもつて彼に迫る人は決して少なくないだろう。けれども彼は、近代の人類学や倫理学は当時は問題とならなかったため、今もまた問題にならないと言って、ただ自分の確信を繰り返し強調するにとどまるかもしれない。とは言え、私たちは今日の科学というものをまったく無視してはならないし、また無視することもできない。宗教と科学とをまったく分離して考えるという近代の考え方は、私たちの取らないところである。科学から見て聖書の記述が合理的とされる時は、聖書に強い支えが与えられた時である。もちろん聖書の教えは神の啓示に基づいているため、

科学の証明を得て初めて真理になるわけではない。しかし、聖書の述べていることを科学もまた裏付けるとなれば、そこに一層の確実性と輝きが与えられるのである。また、頭脳だけで研究される科学が聖書的な真理をすべて完全には証明できないのは、もとより不可能である。それにもかかわらず、科学者が科学的な観点から見ても聖書の記述が誤りではないこと、あるいは真理と見なされるべきことを明らかにしようとするのは、本当に尊い努力である。有名なニュートンはもちろんのこと、比較解剖学の祖であるフランスのキュヴィエ、偉大な動物学者であるアメリカのルイ・アガシのように、いずれも深い科学者であり、深いキリスト者であった。宗教と科学の調和を図ったために、両者を深く、かつ正しく理解することができたのである。宗教的にも科学的にも十分に真理を探索し、真理である以上は固くそれに立つという態度を、私たちは取らなければならない。

パウロの主張は、神は人類に対するとき、その代表者を立てて関われるということにある。これについて誰にとってもまず明白な一つの事実は、人類が一つの種類であるということである。白色人種、黄色人種、銅色人種、黒色人種などの違いがあっても、各人種間の結婚が可能であり、その間に必ず子どもが生まれることは、人類が一体であることを物語っている。また、ある人種の子どもが幼い時に異人種の間で育てば、その国の言葉を正しく話せるようになることや、低い社会道徳の中で育てられて道徳観念が非常に薄い野蛮人が、一度福音を信じるに至ればまったく別人のようになることなども、すべて人類が一つであるという真理を伝えている。人類は一つであるということは、人類学と聖書がともに主張するところである。また、「神は、一人の人からあらゆる民を造り出して」と、パウロはアテネにおいて説いた（使徒の働き十七章二十六節）。

次に私たちが知ることができる明白な一つのことは、人類の共同責任 (solidarity) ということである。これは学問の問題ではなく、人生の実際問題である。事実として、人類の共同責任は厳然として存在している。これを好もうと好むまいと、事実はどこまでも事実である。これから逃れようと努力しても、人は到底逃れることができないのである。見よ、一家において戸主の行うことや現在の状態は、家族全体に影響を与えるではないか。戸主がその家族の代表者であるからである。同様に、町村長の言動はその代表する町村全体に影響し、県知事の言動はその代表する県民全体に影響する。また、大臣や外交官は国民の代表者であるため、その発言や行動は必ず全国民に影響してくる。戦争が起きた場合のような国民全体が受ける大きな災いは非常に甚大であるが、しかも彼ら自身が直接その種を蒔いたのではなく、主に大臣の政策や外交官の行動が開戦へと導いたのである。あることを行うのは代表者であって、その結果を受け、責任を負うのはすべての人である。これを不公平だとして不満を言うのは人の自由である。しかし、人類社会がこのような原理の上に成り立っているという事実は、明確に認められなければならない。つまり、必ず代表者があり、また必ず共同責任がある。家庭、社会、国家、いずれもみなこの事実の上に立っている。これを否定することは、家庭、社会、国家を否定することである。これがなくては人間の集団というものは存在しない。これがあってこそ家庭もあり、国家もあり、社会もあるのである。集団の各構成員は、その代表者の行う善によって、また悪によって、利益を受けたり損害を受けたりする。すべての人間の集団の根本に、この原理が流れている。このことは、十分かつ明確に認められなければならない。

以上のことによつて、二つのことが明らかになった。第一は人類が一つであること、第二は代表者の存在と全

員の共同責任である。すでに人類は一つである。人類は全体で一つの社会を形作っている。ここで、人類全体を代表する者がいなければならない。神はまず始祖アダムを人類の代表者として造られた。彼を、その後に生まれるべきすべての人類の代表者と見なされたのである。アダムは罪のない者として造られた。彼がもし最初の清らかな状態を失わなかったならば、人類は彼にあつてどれほど祝福されたことだろう。しかしながら、サタンは成功し、彼は失敗した。彼は妻とともに罪に落ち、人類の代表者としての責任を汚した。神はやむを得ず彼に死の悲しみを与え、そして彼は人類の代表者であるため、全人類にも死の悲しみを与えた。人類が一つであり、全員が共同責任が原理として存在する以上、これは実にはやむを得ないことである。

しかし、共同責任の原理は人類に災いだけをもたらしたのではなかった。代表者の罪によって死を受けた人類は、ここでまた代表者の義によって生きることを受けるに至ったのである。神はアダム of 失敗を補うために、その独り子を人間として世に降し、彼を人類の新しい代表者とし、彼に人類に代わつて罪の罰を受けさせて人類の罪を赦し、彼に人類に代わつて義を成し遂げさせて人類に永遠のいのちを与える道を取られたのである。人類が一体であることと、代表および共同責任のことを事実として認める上は、このキリストの人類代表と、彼一人から恵みが全人類に及んだことが、決して不合理ではないと分かるのである。十八節の前半は、実に悲しい知らせである。「こういうわけで、一人の違反によって罪に定められることがすべての人に及んだ」と読んで、私たちは人類の共同責任の恐ろしさに震えるのである。けれども、後半がどれほど良い知らせであることか。「一人の義の行為によって義と認められることがすべての人に及んで、いのちを与えられたのである」と言う。キリスト一

人の義が、義といのちを全人類に及ぼすのである。感謝すべきことではないか、このことは！

こうして今や光の時代である。始祖の墮落のために、暗闇の中をさまよい続けなければならなかった人類社会に、今や既に義の太陽は昇ってきて、目がくらむほどの光を放っているのである。キリストがすでに私たちに代わって罪の罰を受け、義を成し遂げられたため、私たちは今彼を信じさえすれば罪を消され、義を与えられ、永遠のいのち恵まれるのである。「神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方にあつて、神の義となるためです」とある（コリント人への手紙第二十五章二十一節）。実に今や恵みの時代である。この大きな幸福が自分に与えられることを思えば、人間世界になお存在する災い、苦しみ、悲しみなどは、言うに足らない。本当にそうである。義の太陽はすでに上り、恵みの光は人類の全野を照らしている。それにもかかわらず、未だにこの光が人類の全体に行き渡らないのはなぜか。言うまでもなく、それは自分の心の戸を閉ざして、この光を招き入れない人がとても多いからである。光が遍く照らしていないのではない。遍く照らしているのに、これを自分の魂の前から退けている人が多いのである。それゆえ、すべての人は速やかに魂の戸を開いて、輝かしい霊界の光を招き入れよ。すべての良いこと、幸いなこと、恵まれることは、このことから起こってくるのである（すべての悪いこと、わざわいなこと、呪われることが、あの一つのことから起こってきたのと同じように）。